

第38回学会大会開催にあたって

～ "余暇のやりくり (Leisure Management) の時代" から

"創りあげる余暇 (Leisure Development) の時代" への

転換点としての学会大会に向けて ～

日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

会 長 鈴 木 秀 雄

関東学院大学教授、Ph. D.

「第38回学会大会開催にあたって」は、先の学会ニュースNO.86 (AUG.2008) に、「人」が「命」をよりよく「活かす」ためには、個人の生きる喜び (Enjoying Personal Living ; EPL) の獲得が最も重要であることについても既報しましたが、改めて、新潟医療福祉大学の御協力を得て、同法人施設のNSGカレッジリーグ学生総合プラザSTEPを主会場に第38回学会大会を開催しますことを重ねてご案内いたします。大会テーマを「地域おこしとレクリエーション」とし、基調講演に「地域おこしとレクリエーション ～その有効性をめぐって～」をお話いただきます。シンポジウムも引き続き地域おこしに沿って活発な議論が進められます。

ところで、その土地の伝統文化や歴史が重要である地域の動きとは裏腹に、世界はグローバル化の波に飲み込まれ、何事も一国の思い (施策) だけでは、容易に課題の克服を図ることが難しい情勢に益々なっています。経済活動などでは、規制緩和の名の下に High Risk, High Return が時に善しとされ、多くの歪みも生じてきました。Low Risk, Low Return でもない、むしろ理想といえども No Risk, Sustainable Society (リスクもなく、持続可能な社会) の構築こそが当然至極重要な地球時代であるといっても過言ではありません。

余暇時代の到来が叫ばれて久しいのですが、個人の側に立った余暇の発想は未だ根付いていません。今まさに、世界は金融危機、経済危機の只中ですが、このような時代にこそ本質的な余暇の問いかけを学会として進めていかなければなりません。勿論、社会の動きは時代とともにその速さや変化の度合いを増しはしますが、しかし個人の余暇生活そのものにはそれほど急激な変化を瞬時にもたらすものでもありません。

換言すれば、余暇そのものに対する信頼は、未だに経済的な動きに社会が強い影響を受けると、途端に余暇そのものの価値も中心的な位置づけから疎外され、結果として個人の生活そのものの中にもたちまち「ゆとりある余暇」がしっかりと位置づけられていないことがうかがえます。

これまで、既に自身が持ち得ている余暇に対する「余暇のやりくり (Leisure Management) の時代」であったと言えるでしょう。しかし、これからは、自身が持ち得ていない領域においても余暇を積極的に産み出していく、「創りあげる余暇 (Leisure Development) の時代」でなければなりません。たとえ社会が大きな変化や激しい変遷をするなかにあっても、豊かな心と真摯な生き方を微動だにしない個人の生活を創りあげていかなければなりません。それは、いつになく、たとえ個人それぞれの私的な関心ごとへの快追求であろうとも、温かい他者への思いやりを決して忘れない多岐にわたる癒しがそこに含まれた余暇の有り様が問われる時代であるのです。

余暇とは、決して余った暇などではなく、創りあげなければ存在しない、自由裁量の「時間」であり、「活動」であり、「状態」であることの余暇認識 (Leisure Awareness) が、その個人の生活そのものを大きく左右することにもなるのです。

グローバルな時代にあっても、むしろその生きている地域 (Local) で、個々人が生き生きと生活していく姿勢を「創りあげていく余暇 (Leisure Development) のなか」に探求していく時代といえるでしょう。この意味からも、余暇を通しての地域おこしとともに、自分おこしを忘れてはならないのです。この学会大会が多くの貴重な研究成果の発表の場であることは言うまでもなく、さらに会員相互の深い交流を通して、「創造する余暇」に向けて、いくつかの価値あるヒントを与えてくれますことを期待しています。